

宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃事業 基本方針

1 慶讃事業の願い ―本願念仏の教えをいただき、次世代に相続する―

宗門は、2023 年、「宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要（以下、「慶讃法要）」を厳修する。

宗祖親鸞聖人は、法然上人との出会いによって本願に帰し、『顕浄土真実教行証文類』（以下、『教行信証』）を著して、本願念仏の教えが全人類を斉しく救う「真」の「宗」であることを開顕された。

私たちは、この『教行信証』を立教開宗の書として受け止め、あらためて宗祖が顕かにされた本願念仏の教えをいただきなおすとともに、次の世代に教えを相続していかねなければならない。それこそが、慶讃法要を迎えようとする私たちに与えられた大切な使命である。

そこで、このたびの「宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃事業（以下、「慶讃事業）」は、2019 年から 2023 年の慶讃法要までのお待ち受け期間、そして法要厳修をはじめ、法要以後の宗門活動をも見据えて、同朋会運動のさらなる推進を図ろうとするものである。

2 慶讃法要の意義 ―教えに出遇った者の「報恩の営み」―

慶讃法要は、宗祖親鸞聖人の御誕生と立教開宗を慶び讃える御仏事である。

宗祖の御誕生、そして立教開宗を慶び讃えるということは、念仏の教えに出遇い、自らにかけられた願いに深くうなずき、そして、その御恩に報いていく歩みに他ならない。それは、人として誕生した私が、念仏の教え・はたらきに出遇う時、人として生まれたことの尊さに目覚め、生まれて生きることを真に喜ぶことのできる者となる、まさに念仏の教えに出遇った者の「報恩の営み」なのである。

このたびの慶讃法要は、一人ひとりが自らにとっての立教開宗の意味をたずね、本願念仏の教えをいただくかけがえのない大切な「時」と「場」を賜ることであり、自らの聞法生活を問いなおし、あらためて念仏申す歩みを確かめていく機縁なのである。

3 現代という時代 ―「人間とは何か」ということが問われている―

私たちは、誰もみな他人と代わってもらったことのできないかけがえのない人生をおくる中、「不安」と「孤独」を感じて生きている。

それは、毎日報道される事件・事故のニュースからも窺えるが、孤独死やひきこもりなどをはじめ、さまざまな社会問題となって顕在化し、子どもたちの世界にまで、教育格差やいじめの問題などとなって現れている。

現代社会では、安心して人と人がともに生きていくことのできる人間関係が失われ、人びとが「不安」を感じ、「孤独」へと追い込まれているのである。

そのような「孤独」に苦しむ私たちは、インターネットによって一時の孤独を忘れさせることを可能にした。しかしそのことによって、常に人とつながっていないことによる不安を生じさせ、苦しみをもたらしているのである。

さらに今後、A I（人工知能）の時代が訪れようとしている。これまでのさまざまな人間の営みがA Iにとって代わろうとする時代を迎える中で、「人間とは何か」ということがまさに問われているのである。

4 宗門の現状 ―さまざまな課題に向き合う―

宗門は、現代社会の「孤独」や「不安」に果たして応えられているのだろうか。それこそ、人びとの心の奥底に届く言葉を発信できていないのではないか。あらためて、僧侶・教師をはじめ、宗門に身をおく一人ひとりの教えに真向かう姿勢と学びの質が厳しく問われているのである。

殊に、全国各地の門徒宅においては、ひとつ屋根の下で数世代がともに暮らし、親から子へ、そして孫へ仏事を伝えてきたお内仏のある生活の相続が、世帯の極小化などによって困難となってきた。また、住職にあっては、過疎化が進む地域においては次世代の門徒とのつながりに、そして、人口流動が激しい都市部においては門徒との関係性の構築や仏事をとおして教えを伝えていくことに苦慮している。

このように、全国の門徒をはじめ寺院を取り巻く状況は、少子高齢化や人口減少などに伴って、寺院運営面をはじめ、教化面の問題など、さまざまな課題が山積しているのである。

今こそこれらの課題に向き合い、「宗門の未来」を創造すべき時である。

5 宗門の将来を見据えて ―あらゆる人びとが教えに出遇える場を生み出す―

同朋会運動は、「門徒一人もなし」との自己批判から「家の宗教から個の自覚（の宗教）へ」というスローガンを見出し、自らが信心を獲得する運動として出発した。そして、教団問題を経た宗門は、現在の宗憲を制定するに至ったのである。その宗憲前文には、宗門運営の根幹として「すべて宗門に属する者は、常に自信教人信の誠を尽くし、同朋社会の顕現に努める」と謳われている。つまり、「自信教人信の誠を尽くす人の誕生」こそが宗門の使命であり、それは教えに基づく人と人との交わり、すなわち「聞法者を育む場の回復・創造」においてこそ果たされるものである。

そのことをふまえ、このたびの慶讃事業は、慶讃法要後の宗門の将来をも見据え、一カ寺一カ寺において、そして、あらゆる場において本願念仏の教えに出遇う場が弛みなく生み出されていくことを願い進めていかなければならない。

そのために、次の3つの方針をもってさまざまな施策に取り組んでいく。

- （1）宗門の基盤づくり―新たな教化体制の構築―
- （2）本願念仏に生きる「人の誕生」と「場の創造」
- （3）あらゆる人びとに向けた「真宗の教え」の発信

以 上